鎌倉の埋蔵文化財3

Buried Cultural Properties in Kamakura 3

平成9年度発掘調査の概要

平成11年3月

鎌倉市教育委員会

～は　じ　め　に～

私たちの暮らす鎌倉は、いたるところに古代の人々の生活の跡や中世の街並みの跡などが遺跡として眠っています。埋蔵文化財といわれるこれらの遺構や遺物は、普段は直接目にすることができませんが、発掘調査によって長い眠りから目覚め、私たちの目の前に新鮮な感動とともにその姿を現します。

埋蔵文化財へのご理解をより深めていただくためには、発掘調査の行われている現地で、遺構や遺物をご覧いただくことが望ましいと思われますが、調査現場の狭さなどから現地説明会を開催できない場合も少なくありません。

そこで鎌倉市教育委員会では、市内で実施された発掘調査の成果を市民の皆様になるべくわかり易くご紹介するために、平成８年から『鎌倉の埋蔵文化財』を発行してまいりました。

『鎌倉の埋蔵文化財』３では平成９年度に発掘調査を行い古代の集落跡が発見された台山遺跡や中世の建物遺構が良好な状態で発見された若宮大路周辺遺跡群などの概要を紹介いたします。これからもさまざまな方法で発掘調査の成果をお知らせするように努めてまいりたいと思っております。

～目　次～

１．倉久保遺跡 …… 3
２．台山遺跡 …… 4
３．横小路周辺遺跡 …… 6
４．若宮大路周辺遺跡群 …… 8
５．米町遺跡 ……10
６．極楽寺旧境内遺跡 ……12
英文要旨 ……14

〈表紙写真の説明〉
横小路周辺遺跡出土の梅樹双雀文鏡
（鋳銅製、直径11.4センチメートル）

～例　言～

◎本書には平成９年度に市内で発掘調査の実施された主な遺跡の調査概要を掲載しました

◎本書に掲載した遺跡の調査概要については各調査担当者に執筆をお願いし、編集は鎌倉市教育委員会文化財課が担当しました。また写真等は当委員会の保管資料を使用しましたが、一部は各遺跡発掘調査団の保管資料を使用させていただきました。

◎本書の作成にあたり、次の方々のご協力をいただきました。深く感謝をいたします。
菊川泉、汐見一夫、宗臺秀明、田代郁夫、田村良照、手塚直樹、野本賢二、福田誠、宮田真、滝沢晶子、若松美智子（五十音順・敬称略）

◎表紙題字は松尾右翠氏に揮毫をお願いしました。

1，倉久保遺跡　Site of Kurakubo

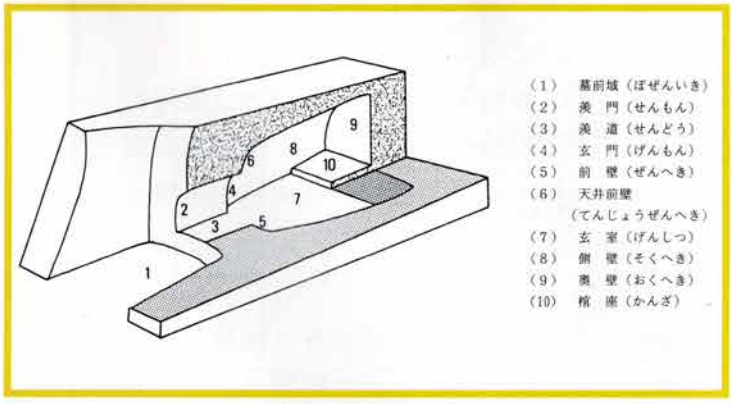
●古墳時代後期の横穴墓

横穴墓は古墳の横穴式石室における埋葬様式の系譜をひくお墓で、古墳時代の後期（主に７世紀代）に盛んに造られたものです。本書でも以前に寺分藤塚遺跡の横穴墓群を紹介したことがあります（『鎌倉の埋蔵文化財２』４～５ページ）。

倉久保遺跡は現在、住宅地となっている寺分の丘陵部の最も北西部分から北側の山崎の谷戸へ向かって下る崖面に位置しています。今回の調査地点は倉久保遺跡の名称で呼んでいますが、本来はかつてこの地域に存在していた山崎横穴墓群という２群42基からなる一大横穴墓群の一つに含まれるものと考えられます。

この遺跡の横穴墓は発掘調査を開始する時にはすでに開口した状況にありましたが、調査の結果、玄室の前半部分が失われていたものの玄室内の奥壁寄りに高棺座が良好な状態に残っていることが明らかになりました。また奥壁にある高棺座の直下の位置からは７世紀の後半頃に静岡県の湖西地域でつくられた須恵器のフラスコ形提瓶が完全な状態で出土しています。こうした形の土器は一般的に横穴墓に葬られた人へ酒などの供え物するための器として遺骸とともに埋葬された副葬品と考えられているものです。

神奈川県内でも藤沢市から鎌倉市にかけての地域に分布する横穴墓は、玄室の床面からかなり高い位置に棺を置くための施設を設けるいわゆる高棺座という構造が形態的な特徴ですが、倉久保遺跡で発見された横穴墓においてもこうした横穴墓の地域的な特徴を確認することができました。



横穴墓の部位名称
（『かながわの考古学』第５集より転載）

横穴墓全景

須恵器の出土状況

出土した須恵器フラスコ形提瓶

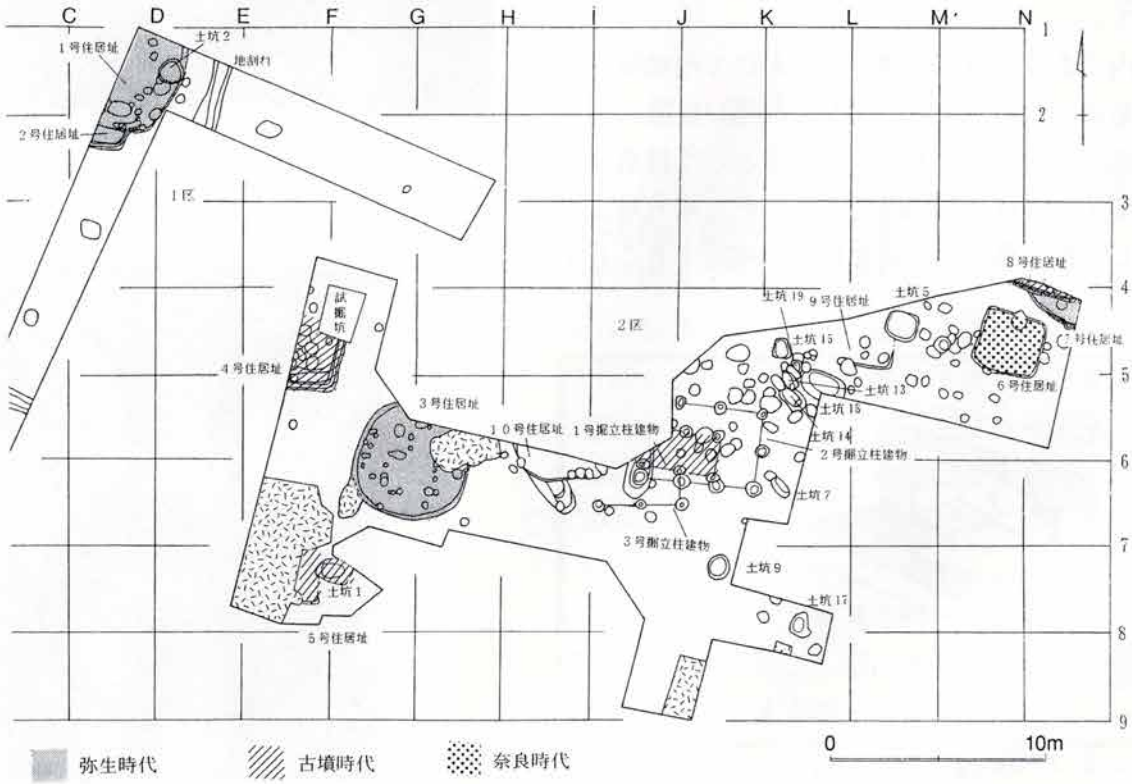
2，台山遺跡　Site of Daiyama

●弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡

台山遺跡は北鎌倉駅の西側一帯に広がる丘陵上に位置し、いわゆる台峯とよばれる丘陵の北東側にあたる標高30ｍから標高50ｍ程の緩斜面に展開する弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡です。遺跡は東西約700ｍ、南北約300ｍの範囲におよんでいます。この遺跡では昭和45年に最初の発掘調査が行われて以来、これまでに８ヶ所で発掘調査が実施されていますが、調査地点はいずれも遺跡の東側、北鎌倉女子学園付近に集中しています。

今回の発掘調査はおよそ300㎡程の面積を対象として実施されましたが、弥生時代の竪穴住居址４軒、古墳時代の竪穴住居址４軒、掘立柱建物３軒、土坑１基、そして奈良時代の竪穴住居址１軒が発見されています。弥生時代の竪穴住居址はいずれも後期（１世紀頃：およそ2000年前ぐらい）のもので、特に３号住居址は良好な状態で見つかっています。３号竪穴住居址は隅丸方形の平面形態で、縦と横の長さがそれぞれ約5.4ｍ程の規模をもち、床面中央には炉が設けられています。この住居址からは甕（台付甕）、壺、高坏、鉢などの豊富な器種からなる多くの弥生土器が出土しています。それらはほとんどが久ヶ原式と呼ばれる東京湾岸系の土器で占められています。

古墳時代の掘立柱建物跡は、これまでに調査の行われた台山遺跡の他の調査地点をつうじて初めて発見されたものであり、この遺跡の集落構成を明らかにするうえで重要な発見といえます。４号竪穴住居址は調査区の西端部で発見されましたが、西側の半分ほどが調査区の外側にまでひろがっており、その全貌を明らかにすることはできませんでした。この住居址では炭化材が見つかっており、この炭化物を科学的に分析したところ、木材の樹種はクリ、モモ、そしてコナラなどに代表されるアカガシ亜属に属するものであることが



時期別遺構図（1/250）

判明しました。この住居址では7世紀中頃のものと見られる須恵器の合子状坏蓋や埼玉県西部の比企地方でつくられた比企型と呼ばれる土師器の坏が出土していることから、古墳時代後期（7世紀頃：およそ1400年前から1300年前ぐらいまで）に属するものと考えられます。

奈良時代の竪穴住居址である6号住居址は、一辺が約3m程のほぼ正方形の平面形態で、北側の壁には竈があり、また南西隅には貯蔵用の施設と考えられる土坑も設けられています。この住居址からは静岡県の湖西古窯で生産された須恵器の蓋や土師器の甕や坏が出土していますが、こららの土師器の甕や坏は県内でよく目にする相模型といわれる土器であり8世紀前半頃のものです。

発掘調査で出土した遺物のうち、特に注目されるものに古墳時代中期（5世紀頃：およそ1600年前から1500年前ぐらいまで）の土器があります。これらの土器は土坑から出土したもので、遺構からは土圧で押し潰れた状態で甕と壺が1点づつ見つかっており、ふたつともほぼ完全な形に復元することができました（写真）。甕は高さが27.2cm、口径16.7cm、底径8.1cm、壺は高さが26.1cm、口径21.2cm、底径6.8cm、いずれも外面には刷毛目の痕跡が明瞭に見られます。今回の台山遺跡の発掘調査では縄文時代の遺構は具体的なかたちで発見されていませんが、弥生時代の3号竪穴住居址からは曽利式という長野県を中心とする中部地方の縄文時代中期の土器が出土しており、興味がもたれます。おそらく台山遺跡一帯には今のところ発見されていないものの、縄文時代の集落遺跡も存在しているものと考えられます。

今回の発掘調査の成果から台山遺跡は、これまで他の調査地点で実施された発掘調査の成果から考えられていた以上に豊かな内容をもつ弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡であることが明らかになりました。

今後は遺跡の範囲とされる丘陵のうち、その西側部分における様相が解明されることに期待がもたれます。

土坑1の土器出土状況

土坑1出土の古墳時代中期の土器
甕（左側）と壺（右側）

6号住居址（奈良時代）

3，横小路周辺遺跡　Site of Yokokōji Area

●二階堂大路沿いの武家屋敷跡

横小路周辺遺跡は鶴岡八幡宮の東、雪ノ下の関取橋から永福寺跡に向かう二階堂大路と推定される道沿いに位置し、近くには鎌倉宮があります。発掘調査の結果、中世の遺構はおおむね４時期にわたって確認されました。この場所に遺構が営まれるようになったのは鎌倉時代前期（12世紀末から13世紀前期）のことで、まず最初に掘立柱建物や井戸が作られるようになりました。鎌倉時代中期（13世紀中頃）になると掘立柱建物だけでなく礎石建物もつくられはじめ、遺跡における建物の棟数も増加します。こうした建物跡のほか、多くの遺物を一括で捨てた遺構も発見されています。この遺構からはかわらけ、白磁の水盤、関西方面でつくられた瓦器とよばれる土器、常滑産の甕、そして和鏡などが出土しています。和鏡は梅樹双雀鏡という呼ばれる銅製の鏡で、鏡の背面に州浜、梅の木、2羽の雀の文様が鋳出されています。鎌倉時代後期（13世紀後半から14世紀前半）の遺構である掘立柱建物跡や柵列跡は泥岩の塊を40㎝もの厚さに積み固めて作られた地面に構築されていました。当時、こうした大規模な土地の造成を成しえたのはやはり有力な武家などであったと想像されます。

鎌倉時代の建物跡が示す軸線は、前期から後期にかけて一貫して調査地点の南に面する二階堂大路に平行もしくは直行するものであり、二階堂大路を意識して建物をたてていた武家屋敷であったことが窺われます。ところが室町時代（15世紀）になるとこの場所には井戸跡や溝跡などの遺構が営まれるようになりますが、溝跡が示す方向性は鎌倉時代を通じて踏襲されてきた遺構群の軸線とは大幅にずれを見せるようになり、土地利用に変化の生じたことがわかります。

横小路周辺遺跡では中世以前にさかのぼる遺構・遺物も発見されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土した平面形がＴ字状の遺構と、奈良時代の焼土遺構が３ヶ所ほど見つかっています。

鎌倉時代前期の遺構

調査地区全景

礎石建物跡と掘立柱建物跡（鎌倉時代中期）

弥生時代後期（西暦２世紀から３世紀中頃：今からおよそ1900～1700年前）のものとみられる高坏は、上部の坏の部分が失われているものの、脚部がほぼすべて残っていました。脚部の中程には木の葉状の透かし穴があり、脚部の下端には鍔がついています。この土器は地元の土で作られてはいますが、器型は静岡県西部、西遠江地域の山中式という型式の土器にとてもよく似ています。東海地方でつくられた弥生時代後期の土器は、最近の研究によって神奈川県の西部地域（いわゆる西相模）だけでなく、県内全域でその出土が確認されており、この時代における東海地方との活発な交流の様子が土器の移動から明らかにされています。

奈良時代（西暦８世紀：今からおよそ1300年前）の焼土遺構からは、土師器の甕や坏が出土しています。また同じ時代の土師器や須恵器は奈良時代の焼土遺構以外にも中世の基盤層からも多く見つかっています。このことから、今回の発掘調査を行った地点のさらに下層、あるいは周辺に奈良時代の住居跡が存在している可能性が高いと思われます。今後とも周辺での調査に期待がよせられるところです。

和鏡出土状況

白磁水盤の出土状況

室町時代の遺構

焼土中の土師器出土状況

弥生土器（高坏）出土状況

出土した弥生土器（高坏）

4，若宮大路周辺遺跡群 Site of Wakamiyaōji Area

●木材が良好な状態で見つかった方形竪穴建築址

若宮大路周辺遺跡群はその名前のとおり、現在の若宮大路を中心とした市街地一帯に広がる遺跡です。その範囲は北側は鶴岡八幡宮の社頭（三ノ鳥居）から南側は大町大路までにおよび、また西側は今小路まで、東側は滑川までにわたります。今回、発掘調査を実施した地点は商店街として賑わいをみせる小町通りの東側に面し、若宮大路の中軸線から西に約86ｍ、二ノ鳥居から北に約86ｍの場所にあたります。

鎌倉の市街地は現在でも地下の水位が比較的高いため、通常は土中に残りにくい木材・木製品等の有機質の遺構・遺物が他地域の発掘調査に比べて良好なかたちで発見されることが多い傾向にあります。これまでにも若宮大路の側溝や河川の護岸、囲炉裏などの主として木材によって築かれている遺構が数多く発見されていますが、今回の発掘調査では方形竪穴建築址が良好な状態で発見され、そこに遺存していた木材の状況からその構造がかなり明らかになったことが最も注目されます。

今回の発掘調査では13世紀前半から14世紀中頃にかけての合計４面の遺構面が確認されています。14世紀中頃の遺構面とみられる第１面及び第２面では、後世の削平などの影響もあり、若干の柱穴以外には明確な遺構は確認されていません。第３面では南北方向及び東西方向の道路状遺構各１本、溝１条、掘立柱建物跡１棟、土壙４基が確認されています。東西方向の道路状遺構の南側には道路状遺構と軸線を同じくする掘立柱建物跡が見つかっており、またこの掘立柱建物跡の北側と西側には網代壁が見つかっています。南北方向の道路状遺構の東側には溝が見つかっており、この溝は南北道路の側溝と考えられます。第４面では柱穴列２列、方形竪穴建築址１棟、土壙５基が確認されています。方形竪穴建築址は上層にあたる第３面の南北方向道路状遺構の直下で発見されました。つまりこの建物は、第３面が造成された際に南北方向の道路を構築するために取り壊されたものと思われます。方形竪穴建築址の西側には建物から約３ｍ程の間隔をあけて建物と同様の軸線をもつ南北方向の柱穴列が見つかっており、建物の目隠し塀があったものと考えられます。

ところで方形竪穴建築址という言葉はやや耳慣れない言葉かも知れませんが、鎌倉市内をはじめ各地の中世遺跡で確認されている建物遺構に対いて名付けられた学術的な用語です。中世以前の竪穴住居跡とも掘立柱建物跡とも構造的に異なる建物遺構を正しく表現し、理解するために生まれた新しい用語で、おおむね以下のように定義されています。

１．平面方形で壁面は垂直、底面は平坦に地面を掘り窪めたもの。
２．平坦に掘り窪めた壁底面から石材・木材を使い壁を立ち上げたもの。
３．壁材を支えるために内側に大小の間柱（まばしら）を配するもの。

建物１の発見状況（北から）

建物１の発見状況（南から）

4．壁材を支えた間柱は、壁に沿って掘立柱あるいは杭状に打ち込んだり、地面を方形に掘り窪めた掘り方の底面、壁に沿って配した土台角材にほぞ穴を穿ちその上にて建てたもの。

5．間柱は、壁板を支えるだけでなく建物の構造材として使用されているものがある。

6．地面を方形に掘り窪めた掘り方の底面、壁に沿って配した土台角材に、鎌倉石の切石を地覆石（じぶくいし）としたり、礎石、礎板が敷かれることがある。

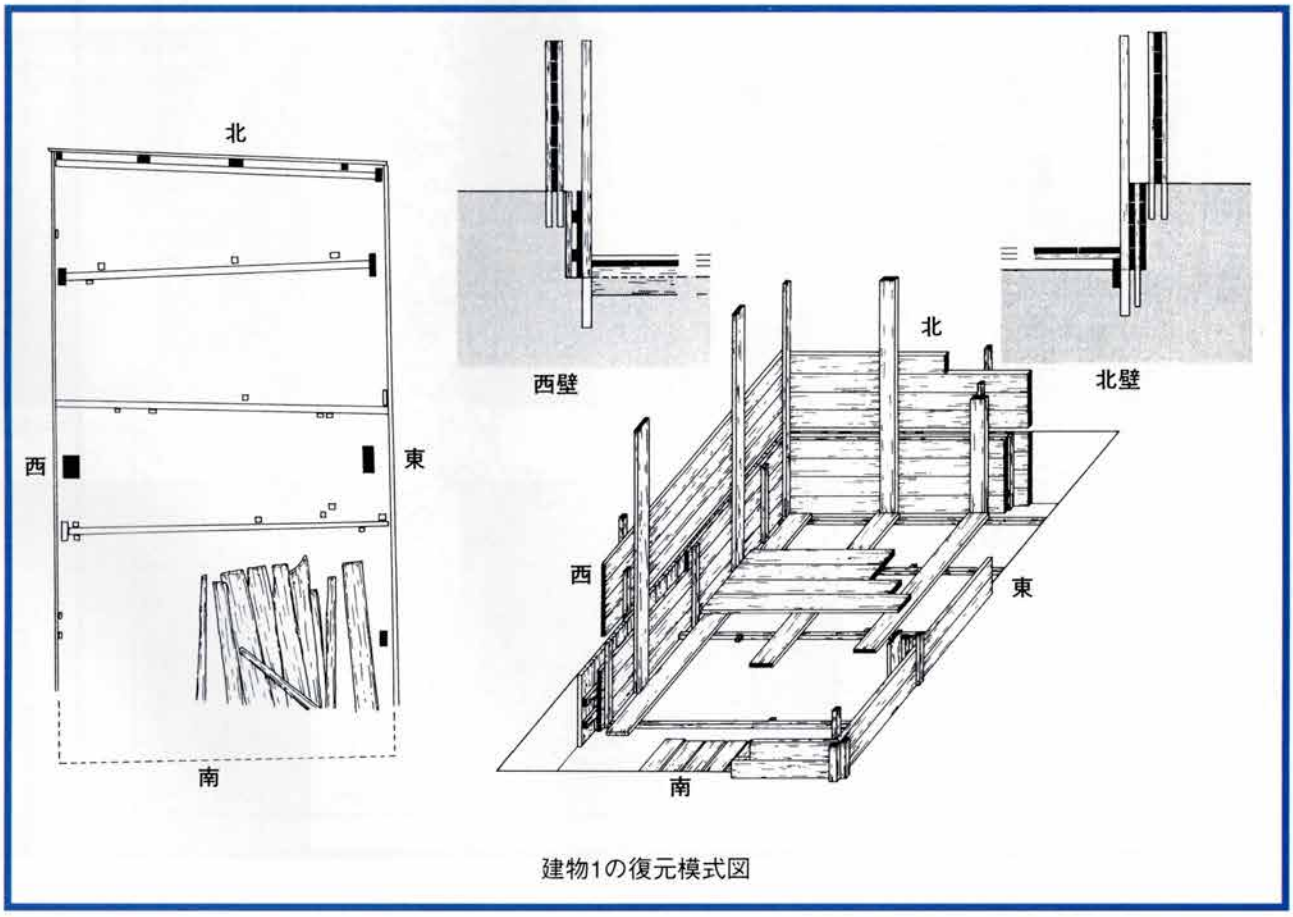
7．鎌倉石の切石は地覆として土台角材の下の他に、建物の床面総てに敷かれる場合がある。

8．多くの場合底面に根太（ねだ）材が敷かれることから、基本的には床が張られていた。

方形竪穴建築址は長軸となる南北が３m以上、東西が約２m、当時の地面から建物の床面までの深さが約60cmの規模をもつ長方形の半地下式の構造をもつ建物です。南側の壁板や柱が建物の内側に倒れ込んだ状態で発見されました（写真）。方形竪穴建築址の底面には幅10cm程度の角材４本が建物の短軸（東西）方向に約60cmの間隔で並べられており、これらは床を張るための根太材と考えられます。建物の地下部分の壁の構造は、地面を垂直に掘り込んだ壁面に直接横板を張り間柱で押さえ、さらにもう一重横板を張り付け間柱と柱で土圧を支えていました。建物の地上部分の壁の構造は、直接地表から地面に打ち込んだ２本の柱材の間に、横板をはさみ込んで釘で打ち付けて壁としていました。調査の際、方形竪穴建築址のなかに倒れ込んでいた北側の壁をもとに推定される地上に出る壁の高さは少なくとも90cm以上になることが明らかになりました（復元模式図）。

第４面で発見された方形竪穴建築址は、第３面を造成して南北方向の道路がつくられる際に取り壊されていることから、13世紀中頃に廃絶したものと考えられます。したがって、これまでに鎌倉市内の発掘調査で確認されている方形竪穴建築址の最も古いものといえます。

なお出土した建物の木材を科学的に分析したところ、木材の樹種は根太、柱、壁材で採取したサンプルのすべてがスギであることが判明しました。



建物1の復元模式図

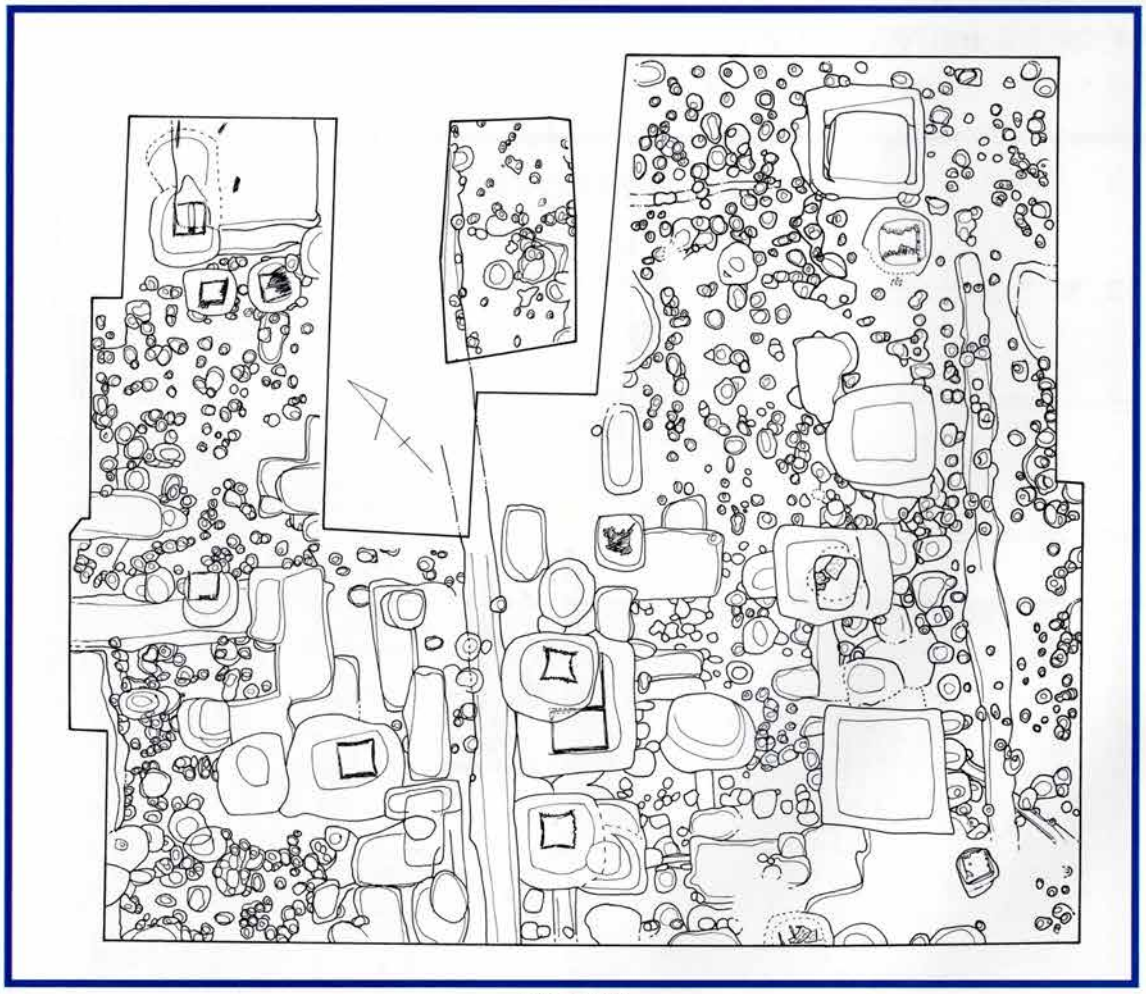
5，米町遺跡　Site of Komemachi

●多数の井戸などが発見された大町大路沿いの遺構群

米町遺跡は大町大路（現在の国道134号）の大町四つ角から逗子方向へ２７０ｍ程東に位置し、道路をはさんだ向かい側（北西方向）には国の重要文化財に指定されている徳治３年(1308)銘のある宝篋印塔や北条政子の墓と伝えられる宝篋印塔などで知られる浄土宗寺院安養院があります。文献史料によれば、建長３年(1251)、鎌倉幕府の奉行は商業地域である町屋（小町屋）の設置を鎌倉市中では大町・小町・米町・亀ヶ谷辻・和賀江・大倉辻・気和飛（仮粧）坂山上の７ヶ所に限る旨の命令を発しています。同様の命令は文永２年(1265)にも再び発せられており、その際には町の設置を許可する場所として大町・小町・魚町・穀町（米町のことか？）・武蔵大路下・須地賀江（筋替）橋・大倉辻の７ヶ所が指定されています。調査地点の周辺には現在も米町という字名が残っており、ここ米町一帯ではおそらくその名のとおり米を主体とする商品を扱っていたことが想像され、鎌倉時代から室町時代にかけて最も賑わった地域の一つであった様子が窺われます。

調査の結果、鎌倉時代～室町時代にかけて人々が生活を営んだ２時期にわたる遺構群が確認されました。１面は鎌倉時代末期から室町時代（14世紀中頃～15世紀初頭）の遺構群で、区画性を持った土丹地業、土壙、柱穴列などが発見されています。柱穴列は南北方向のものが１列、東西方向のものが３列確認されています。これらの遺構群からは遺跡地の土地利用に一定の区画性のあったことがある程度認められるところですが、遺構の数そのものは少なく、やや閑散とした印象を受けます。ただし同じ１面上では江戸時代の鍛冶場遺構も見つかっており、室町時代以降の時期にそれ以前に営まれていた鎌倉時代の遺構群がかなり撹乱されてしまった可能性も考えられます。

２面は鎌倉時代（13世紀初頭～14世紀前半）の遺構群で、建物跡、井戸、路地など当時の住空間がまとま



2面全体図

って発見されています。調査区の東側には、大町大路と直交する南北方向の路地が発見され、路地の西側の一帯は柱穴列で「コ」の字型に区画されています。区画された敷地内はさらに溝や方形土壙によって地割りがなされ、地割りの東部には掘立柱建物が、また地割りの西部には掘立柱建物に付属する方形竪穴建築址が配置され、住み分けがなされていた様子が窺えます。掘立柱建物には柱間が3間以上×3間以上の規模をもつ大型のものも確認さています。井戸はいずれもしっかりとした作りのもので、特に東部で発見された4基の井戸は掘り方の一辺が3m～4m、深さが6m以上の規模を有するもので、鎌倉市内で発見されている一般的な井戸よりもかなり大型の井戸です。深さが6m以上の規模をもつ井戸としては今小路西遺跡（御成小学校内）の武家屋敷で発見された六角形の木枠をもつ井戸がありますが、掘り方の規模がこれほど大きな井戸は鎌倉市内でもあまり発見例がありません。こうした井戸の在り方からは、大量の水を必要とするほど大勢の人々がこの地に生活を営んでいたものと考えられます。

一方、発掘調査で出土した遺物をみると質的にも豊かな内容をもつ大量の遺物が見つかっています。なかでも国産の陶器では常滑の突帯付三耳壷は鎌倉でも初めての出土例であり、全国的に見てもめずらしい器形のものとして注目されます。さらに舶載陶磁器では中国産緑釉獅子頭付壷や青磁の露胎双魚文皿、木製品では花文の墨書のある折敷、金属製品では銅製の野沓（馬具）や兜の冠座など稀少な遺物も出土しており、石製品では硯にも優品がみられます。

これまで米町一帯は町屋としての性格を強く示す地域と考えられてきましたが、今回の発掘調査によって発見された遺構群は、これまで理解されてきた町屋的な遺構とはやや異なる在り方を示しています。雑然とした多数の柱穴によって構成される掘立柱建物やそれに付属する方形竪穴建築址、規格材を用いず多くは転用材を使用した建物や井戸などの遺構群が町屋的な遺構と考えられてきました。この点については今回の調査地点で確認された遺構の在り方にも認められるものですが、大規模な地業、溝や柱穴列によって示される区画の規則性、多数の大型の井戸などの遺構の在り方はむしろ武家屋敷的なものという印象が窺われます。質的に優れた稀少な遺物が出土する理由の検討をふくめ、今後とも調査成果の検討からこの地域の歴史的な様相解明が必要と言えましょう。

鎌倉時代末頃の土丹地業

2面全景写真

鎌倉時代の井戸跡

硯の出土状況

漆器の出土状況

常滑の突帯付三耳壺

6，極楽寺旧境内遺跡　Site of Gokurakuji Temple

●関東における律宗布教の最大拠点寺院

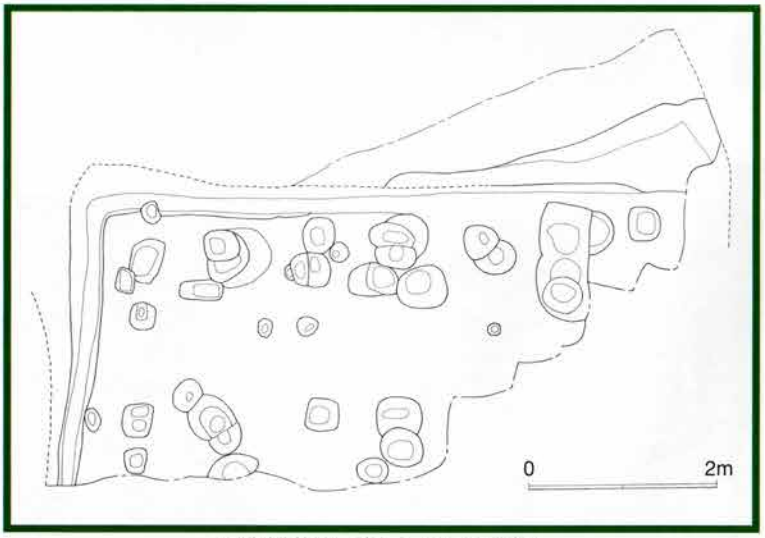
極楽寺は真言律宗西大寺末で霊鷲山感応院極楽寺と号し、正元元年（1259）に北条重時が以前よりあった極楽寺に良観房忍性を開山に迎え、律院としたことにはじまる鎌倉を代表する寺院のひとつです。実際の寺容が整ったのは開山忍性が入寺した文永四年（1267）以後のこととみられます。忍性は奈良西大寺の叡尊について戒律を学び、病人や貧民の救済に努めた高僧です。往時の極楽寺の姿は今も寺に残る『極楽寺絵図』（作成は江戸時代）によって知ることができ、現在の極楽寺の境内よりもかなり広い範囲にまで境内伽藍がおよんでいたことがわかります。この絵図には金堂、講堂、方丈華厳院などの中心的な伽藍をはじめ多くの支院が描かれています。

今回発掘調査を実施した場所は極楽寺の北西にあたる西ヶ谷と呼ばれる谷戸に位置しています。この谷戸は西から東に向かって開口する小さな谷戸で、調査地点は谷戸の北側縁辺で海抜52ｍ程のところにあたります。周辺は現在、住宅が建ち並んでしまっていますが、付近の地形や昭和30年代の地形図から見ると以前は尾根が今よりも大きく張り出していたようであり、幾つかの平場をもつ比較的懐の深い谷戸であったことがわかります。

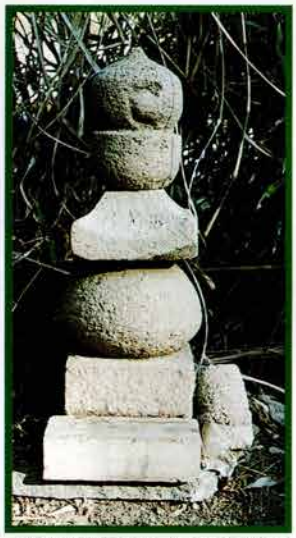
発掘調査を実施した面積は約25㎡とわずかですが、数10cmの堆積土を取り除くと、人為的に開削されたほぼ平坦な岩盤が現れ、多数のピット（柱穴）と細い溝が発見されました。堆積土は山の崩れた土砂ないしは近世以降に盛られた土で、中世の遺物は含まれていませんでした。平坦な岩盤面は南側と東側が削り取られているものの３ｍ×６ｍ程の方形で、平坦面の北西壁やピットの壁には鑿や鏨とみられる工具痕が数多く明

発見された岩盤上の遺構（北側から）

発見された遺構（西側から）



遺構全体図（図の上方が北側）



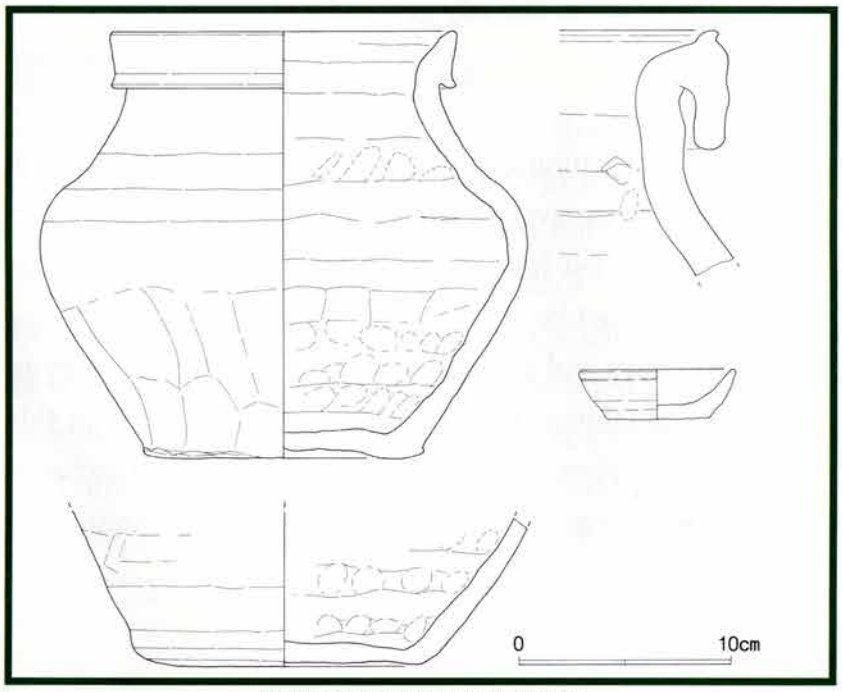
調査地近くにある五輪塔

瞭に残っており、中世の人々が苦労して岩盤を開削した様子が偲ばれます。

溝は幅20㎝前後で北壁中央付近から西側を巡り、南側に向って低くなっています。こうした構造をもつ溝は排水のためのものと考えられます。溝の深さは北壁中央付近で４㎝程、西側の角で７㎝程、南端で10㎝程の浅いものです。

ピットは大小あわせて合計38個が発見されました。平坦面北側と南側にやや偏ってピットが掘られており、同じ様な場所に重複して発見されました。大きいピットは平面形が隅丸方形のものと不正円形のものとに大別され、さらに不正円形のピットは深いものと擂鉢状に浅いものとに分れます。隅丸方形のピットは一辺が25～50㎝内外で深さが30㎝前後、底面はほぼ平らな形態のものです。また不正円形で深いものは直径50㎝内外で深さが45cm前後で平坦面の北西側に多く、底面には柱痕と思われる丸い凹みが見られるものもいくつかありました。擂鉢状のピットは直径40㎝内外で深さが30㎝前後、底面は不正形で粗い工具痕が顕著に見られました。小さいピットは直径が15～20㎝内外で深さが10㎝前後のものです。小さいピットは大きいピットを等間隔に区切るような位置にに見つかっています。

発掘調査で出土した遺物には素焼きの土器であるかわらけ、常滑窯の広口壺・甕などが見られます（図面・写真）。かわらけは口径7.2㎝、底径4.9㎝、器高2.4㎝の小型のものです。常滑窯の広口壺は復元口径16.0㎝、肩部最大径23.0㎝、底径12.4㎝、器高20.2㎝のものです。また常滑窯の甕底部は底径12.8㎝、残存器高7.4㎝で表面は二次的に火を受けた痕跡が見られます。いずれも鎌倉市内の発掘調査では15世紀代の遺跡からよく出土するものといえます。　発掘調査で見つかった遺構は、建物跡と考えられると同時に、中世墳墓やぐらの床面施設とも考えられます。建物の跡と考える場合、人為的に開削された岩盤上で見つかった大きいピットは建物の柱穴とみられ、また小さいピットは建物の床束とみられます。やぐらの床面施設と考える場合、擂鉢状のピットは納骨穴または蔵骨器を埋納する穴とみられ、天井や両側の壁が崩落してやぐらの床面だけが残った状況とみられます。常滑窯の広口壺を蔵骨器として使った事例は、同様なものがこれまでにも鎌倉市内のやぐらの調査で見つかっています。さらに調査地の一角には、後世に積み替えられてはいるものの、鎌倉・室町期の形態的特徴がもつ風化した五輪塔が無造作に置かれています。発見された遺構が建物跡であるのか、あるいはやぐらの床面施設であるのか、性急に結論を出すことはできせませんが、今後とも往時の極楽寺境内の様相を明らかにするうえで貴重な成果となることでしょう。



極楽寺旧境内遺跡の出土遺物

常滑窯の広口壺・甕とかわらけ

Excavated Cultural Properties in Kamakura

1. Site of Kurakubo

Kurakubo site showed an Oketsubo engraved tomb chamber on steep slope of hills, is one of the Great Yamazaki Oketsubo group comprising 42 engraved tomb chambers belonging to the late phase of Kofun Period (7th century). These chambers have the Kokanza which is characteristic high step floor for setting the coffin in Fujisawa and Kamakura cities. A complete jar of flask shaped was found on the floor by the Kokanza.

2. Site of Daiyama

Daiyama site is the village settlement belonging to Yayoi Period to Nara-Heian Period and extends c. 700m ×c. 50m on Daimine hill, north-western part of Kamakura. The 9th expedition in this site revealed 4 dwelling pits of Yayoi Period, 4 dwelling pits and 3 buildings with pillars directly in the ground (Hottatebashira tatemono) of Kofun Period, and a dwelling pit of Nara Period. Many styles of pottery, the cooking pots with stand, the vases, the dishes on stand and the bowls were discovered from the floor of a rectangular dwelling pit of the late phase of Yayoi Period (A.D.1st century). Types of these potteries are designated "Kugahara" which were manufactured around the coast of Tokyo bay. Structures of Kofun Period indicate the settlement form consisting of a Hottatebashira tatemono and dwelling pit houses. One of these dwelling pits of Kofun Period had Hiki type dishes made in western part of Saitama-Ken of 7th century. The dwelling pit of Nara Period unearthed a Kosai ware and Sagami (old name of southern Kanagawa-Ken) type dish pottery. Kosai ware was manufactured in Shizuoka-Ken of 8th century. Daiyama site has been shown the fertile lives from Yayoi to Nara Periods.

Since systematic excavations had been done in early 70s', excavations of Medieval Age of Kamakura have been reconstructing the city and the people's way of life in the city gradually.

3. Site of Yokokoji Area

Yokokouji shuhen iseki, lies beside Yokokoji, the street running through Sekitori-hashi to Yofukuji Temple, has unearthed a part of a Bushi residence. Latest excavation in this site brought out the structures and many relics. The Structures of endo of 12th to fist half of 14th century erected with huge preparations to housing. The relics are pottery dishes, a white porcelain basin, black pottery dishes manufactured in Kansai area (gaki), jars of Tokoname ware and a bronze mirror end of 12th century to 15th century. These relics and activities show that a inhabitant was the powerful Bushi. And in this site, we found a dish on stand of the late phase of Yayoi period. The style of this pottery manufactured in way of western Shizuoka-Ken, but the fabric of it was local clay. That indicates active communications between Tokai area and Sagami area.

4. Site of Wakamiyaoji Area

Site of Wakamiyaoji area lies along the Wakamiyaoji, main street of the medieval Kamakura city. We could find the organic relics in there, because of high water table used to be the sea in Jomon period. Latest excavation in the site showed 4 residential floors of 13th to middle of 14th century with a street east-west direction, a drain or a ditch, a Hottatebashira tatemono and a rectangular pit architecture (Hokeitateanata tatemono) and other post-holes. In these structures, wooden structural materials remained in the Hokeitateana tatemono in site. We could see the original picture of that (see the reconstruction sketch). And analysis showed that these materials are the Japanese cedar.

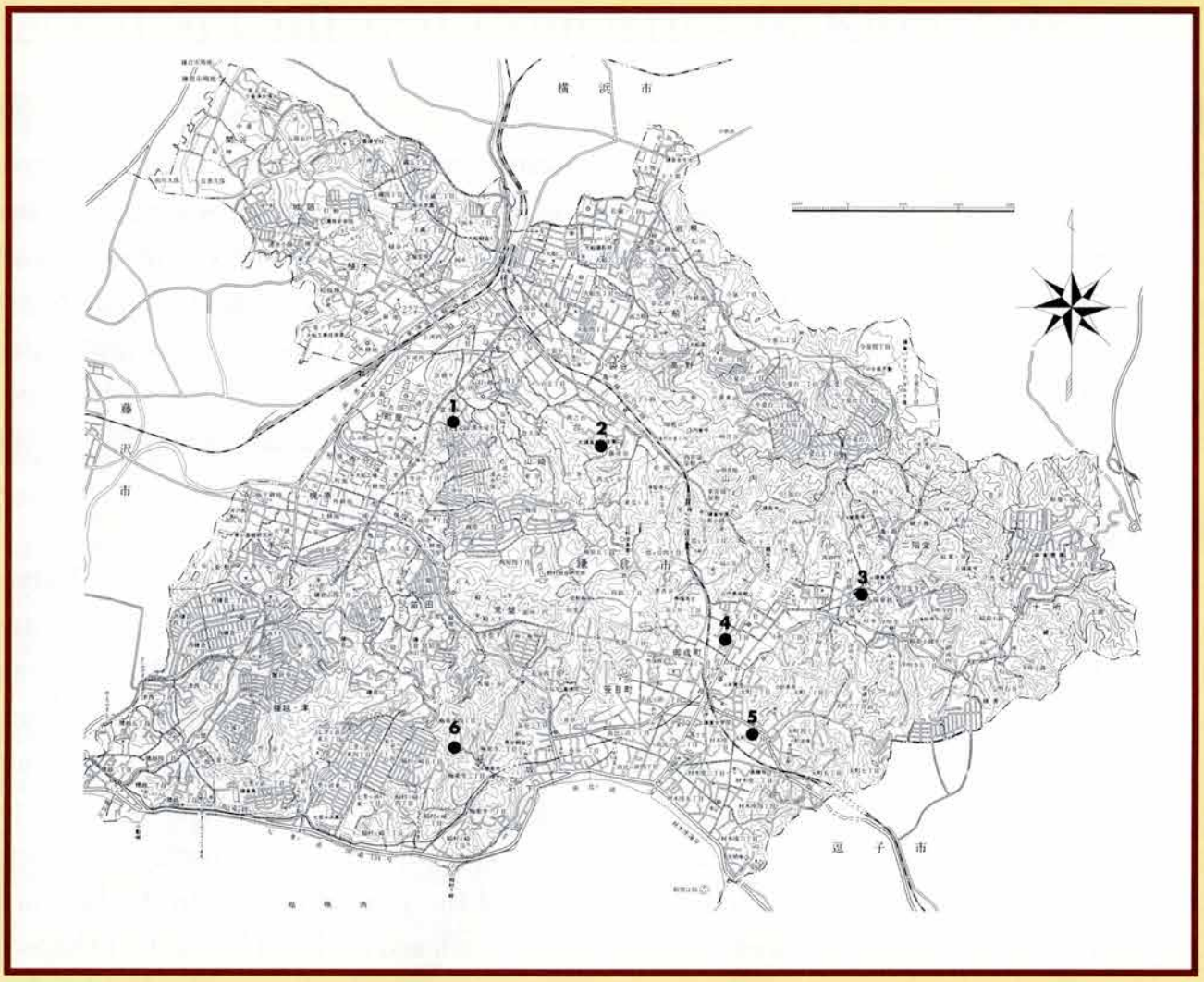
5. Site of Komemachi

Komemachi site extends along the Oomachioji (R.134). It was approved Oomachi, Komachi, Kamegayatsu, Wagae, Okuranosuji and Kewaisaka as commercial area by the government (Kamakura Bakufu) in 1254, then Oomachi, Komachi, Oomachi, Komemachi, Musashiojishita, Sujikaehashi, Okuranotsuji in 1265 again. As we have an old village name of Komemachi around the site now, it could be supposed that there was a commercial area in Medieval age (Kamakura to Muromachi periods). Latest excavation in this site brought out the residential floor of early 13th to fist half of 14th century. The structures are a lane crossing at right angle to Oomachioji, a couple of Hottatebashira tatemono, wells, and ditches which divided the ground of west to the lane in two. Western ground to the lane was prepared housing by huge earth and enclosed by the [コ] shaped line of post-holes. Excavated relics include superior ones like as a green glazed pot with a lion head made in china, a celadon basin decorated in the center with applied two fish design, a bronze Nogutsu (a horse gear) and an inkstone. These structures and relics indicate that Komemachi site area was not only the commercial town but also the residential area for Bushi.

6. Site of Gokurakuji Temple

Gokurakuji temple was established by Hojou Shigetoki and Ninsho in 1259 as a member of Shingon (Mantra) denomination Risshu (vinaya) Saidaiji school, and that was the largest base for the missionary work of Shingon Risshu faith into the Eastern Japan. Latest excavation in the old Gokurakuji temple area unearthed a jar of Tokoname ware and many post-holes and a narrow ditch on the artificially removed flat bedrock in small excavation area, 25 square meters. It is not definite that these structures were a building or included in Yagura which was well known as the cave tomb for Buddhist priests of the Eastern Japan, typically in Kamakura. The jars, same type of the jar excavated from this site, were used for the cremation urn sometimes in other Yagura. Anyhow, it is necessary to continue excavations to bring to light the ancient Gokurakuji temple.

本書掲載の調査地点



《掲載遺跡名称一覧》

1　倉久保遺跡　　2　台山遺跡　　3　横小路周辺遺跡

4　若宮大路周辺遺跡群　　5　米町遺跡　　6　極楽寺旧境内遺跡

鎌倉の埋蔵文化財3

発行日　平成11年3月31日

編集・発行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　グランド印刷株式会社